晴読雨読

『病院図書館の世界
—医学情報の進歩と現場のはざまで』

奥出麻里　著（図書館サポートフォーラムシリーズ）

東京　日外アソシエーツ株式会社
2017 年 3 月 25 日発行
19 cm　186p　ISBN : 978-4-8169-2649-5
定価 2,700 円＋税

冒頭では病院図書館における一日の仕事の流れが紹介される。医中誌や PubMed といったデータベースや Google を使っての文献検索、NACSIS-ILL による相互利用、雑誌や図書の受け入れ、合間には図書館利用者である病院職員からのさまざまな問い合わせの対応。病院図書館の特徴や歴史にも触れられており、新任病院図書館司書には第 1 章を読むだけでも仕事のマニュアルとして大いに参考になるだろう。

第 2 章以降は、1977 年から 2016 年まで病院図書館で働いてきた著者の体験が惜しみなく記録されている。4 回にわたる図書館の引っ越し、手書きからワープロ、パソコンへのハード面の変遷、紙の情報からインターネット、電子ジャーナル、図書館システムといったソフト面の変遷、病院図書館や大学の医学図書館との人的ネットワークの広がり、東日本大震災時の病院職員としての経験など、ベテラン司書には懐かしく、新人司書には目から鱗が落ちるようなエピソードかもしれない。

著者は、フルタイム勤務の傍ら大学院に入学し最短 2 年で修士号を取得されたり、日本医学図書館協会や病院図書室研究会（病図研：現 日本病院ライブラリー協会）をはじめ、病院外の多数の組織でも精力的に活動されたり、海外の研究発表会に赴かれたり、多数の論文や『図解 PubMed の使い方』を執筆されていたりと、多岐にわたって活躍されている。そんなスーパー司書が在籍する病院でも、病院図書館や患者図書館を運営するにあたり理想との落差があることは、現実の厳しさを思わせる。

軽やかな文章で綴られる波乱万丈な著者の半生は、さながら NHK の朝ドラを見ているようである。明るい笑顔のヒロインが、病院の経営に翻弄されながらも、周囲の人間関係を広げ、利用者に喜んでもらえる「コンビニのような 24 時間利用できる図書館」を目指し奔走する物語が脳内に広がる。

本書には近畿病院図書室協議会（病図協）の名前も何度か登場する。かつては、病院図書館は日本医学図書館協会（JMLA）には加入が認められず、JMLA に加入していないからという理由で大学図書館から ILL を断られた時代もあったという。関西地方を中心とした病図協と関東地方を中心とした病図研が病院図書館間のネットワークを築き、当たり前に享受しているネットワークやシステムが現在に至るまでに、苦労して切り拓いてくださった道程を知ることができる。

病院図書館は基本的に「ワンパーソン・ライブラリー」のところが多く、司書は各々の職場で孤軍奮闘している。本書はそんな病院図書館司書に 24 時間あたたかく寄り添い、励まし、「ホスピタル・ライブラリアンシップ」を教えてくれる一冊である。

（大津赤十字病院／深井　鮎美）